



Title	『マカーマート』の言語遊戯：「マディーラのマカーマ」に即して
Author(s)	岡崎, 桂二
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2001, 1, p. 11-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105239
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『マカーマート』の言語遊戯 ——「マディーラのマカーマ」に即して——

岡崎 桂二*

第1章

その作者であるハマザーニー (Abū al-Faḍl Aḥmad b. al-Ḥusayn al-Hamadhānī, 968~1008) に「時代の驚異 Badīʿ al-Zamān」という最大限の評価を示す呼称をもたらした『マカーマート』は、アラブ文学における全く新しいジャンルの作品とみなされており、ハリリー (1054~1122) の作品を頂点に、この新しいジャンルの文学に手を染める文学者は数多い¹⁾。また押韻散文 (サジュウ) と呼ばれるマカーマート独特の文体は多くの追随者を生み、現代に至るまで長く影響を及ぼしており、荘重な演説や書物の序文に顕著に見られる²⁾。

* 四天王寺国際仏教大学 教授

※ J.A.L. (Journal of Arabic Literature) と C.H.A.L. (The Cambridge History of Arabic Literature, Cambridge University Press) の略称を用いた。

- 1) ザマフシャリー (d.1143) やスユーティー (d.1505) を筆頭にマカーマートの実作や注釈に筆を執った人物のリストは「名士録」を構成する程である、というアレンの意見も過言ではない程に、マカーマートは学識、実作の両面において自己のアラビア語能力を発揮するのに最適なジャンルとみなされた。近代においてもヤージジー (d.1871) が『双海の合流点 *Majmaʿ al-Baḥrayn*』を書き、またムワイリヒー (d.1930) も『イーサー・イブン・ヒシャームのハディース』を著しており、このジャンルの持続的な影響力を示している。R. Allen, “Literary History and Generic Change: The Example of the Maqāma,” I. R. Netton (ed.), *Studies in honour of Clifford Edmund Bosworth: Vol. 1, Hunter of the East* (Leiden, Brill, 1998). またこの新しいジャンルの影響はアンダルシアにも及び、ハリージー (d.1225) はヘブライ語でマカーマートを著している。

マカーマートの概説としては、A. F. L. Beeston, “Al-Hamadhānī, al-Ḥarīrī and the Maqāmāt Genre,” J. Ashtiany et al. (eds.), *ʿAbbasid Belles-Lettres* (C.H.A.L., 1990) が簡潔であり、R. Allen, *The Arabic Literary Heritage* (Cambridge University Press, 1998) が近現代への影響を述べている (pp. 268~283)。アラビア語では小著ながら Shawqī Dayf, *Al-Maqāma* (Cairo, Dār al-Maʿārif, 1987) が通史として役立ち、M. Sulaymān, *Al-ʿAdab al-Qiṣaʿī ʿinda al-ʿArab* (Beirut, 1983) がアラブ文学史上での意義を考察しており (pp. 335~385)、M. al-Shakʿa, *Badīʿ al-Zamān al-Hamadhānī* (Beirut, ʿĀlam al-Kutub, 1983) がハマザーニーの多方面にわたる文学的営為に関する包括的な研究書として有益であり、第3部 (pp. 303~423) を『マカーマート』の考察にあてている。

- 2) ビーストンが指摘するようにサジュウに関しては広く誤解があるようで、時代とともにその語義や形態が変化していることに注意すべきである。また単に押韻のみならず パラレリズム (対句表現) がマカーマート独特の文体を作り上げているという重要な指摘もなされている。A. F. L. Beeston, “Parallelism in Arabic Prose,” *J.A.L.*, V (1974), do., “The Role of Parallelism in Arabic Prose,” A. F. L. Beeston et al. (eds.), *Arabic Literature to the End of the Umayyad Period* (C.H.A.L.,

しかしマカーマートをめぐるこれまでの研究は、マカーマートという語の意味内容や、その創始者はだれなのか、あるいはヨーロッパ文学への影響、といったテキスト外の問題に集中され、テキストそのものの分析は余り行なわれてこなかった³⁾。だが近年、モンローの専著を初めマカーマートのテキスト分析が活発になされるようになってきた⁴⁾。本稿は最近のマカーマート研究の成果を基にして、ハマザーニーの『マカーマート』中の「マディーラのマカーマ」を対象にこの物語の構造分析を行い、『マカーマート』の本質を虚構性にとらえ、その虚構性を支えるためにコトバの特質がどのように関与しているかを考察する。

まずハマザーニーの『マカーマート』がいかなる基本構造を持つテキストであるのかを、最も短い話の一つである第3話「バルフのマカーマ」を基に考察してみよう⁵⁾。

第2章「バルフのマカーマ」の構造

イーサー・ブヌ・ヒシャームは我らにこう話して聞かせた。若い頃、僕は布地の商いにバルフにまで旅をしたことがある。まさに青春真っ盛りの時じゃ。心には何の悩み事もなく、身には贅を尽くした衣を纏い、頭の中では子馬を操るように、まあ勝手気儘なことを考えていたのじゃ。商いのかたわら、今はもう誰も使わない珍しい言葉を拾い集めようとも考えていたのじゃ。だがな、バルフに居る間に、僕を負かすほどに見事に言葉を操る者をついに耳にすることはなかった。引き絞った弓が元に戻るように、僕も故郷へ還る旅につこうとしていた。将にその時に、一人の若者が現れ

Cambridge, 1983)。また『マカーマート』の押韻に関しても論争が起きており、T.Iváni, "On Rhyming Endings and Symmetric Phrases in Al-Hamadhānī's Maqāmāt," J.R.Smart (ed.), *Tradition and Modernity in Arabic Language and Literature* (Richmond, Curzon Press, 1996) に対する批判論文として、G.J.Van Gelder, "Rhyme in Maqāmāt Or Too Many Exceptions do not Prove a Rule," *Journal of Semitic Studies*, XLIV (1999) がある。

- 3) マカーマートの語義に関しては D.S.Richards, "The Maqāmāt of al-Hamadhānī: General Remarks and a Consideration of the Manuscripts," *J.A.L.*, XXII (1991) が *majlis* との対比より, *maqāmah* (マカーマートの単数形) には, 「立っている」⇒「立って話をする人」⇒「その人の話」⇒「その人の話を聞く場」という重層的な意味が含まれていることを指摘し, 「座談 *séance*」という訳語の不適切さを指摘している。またマカーマートの成立過程に関しては A.F.L.Beeston, "The Genesis of the Maqāmāt Genre," *J.A.L.*, II (1971), J.N.Mattock, "The Early History of the Maqāma," *J.A.L.*, XV (1984), D.S.Richards, *op.cit.* 等を参照。マカーマートのスペインのピカレスク・ロマンへの影響に関しては J.T.Monroe, *The Art of Badī' az-Zamān al-Hamadhānī as Picaresque Narrative* (Beirut, American University of Beirut, 1983) や, J.Abu-Haidar, "Maqāmāt Literature and the Picaresque Novel," *J.A.L.*, V (1974) が要領よく纏めてある。

- 4) J.T.Monroe, *ibid.*, A.F.Kilito, "Le Genre 'séance': une introduction," *Studia Islamica*, XLIII (1976)。

- 5) 使用テキストは *Badī' al-Zamān al-Hamadhānī*, ed. Muḥammad 'Abduh (Beirut, Dār al-Mashriq, 1968) と, M.Y.D.'Abd al-Hamīd, *Sharḥ Maqāmāt Badī' al-Zamān al-Hamadhānī* (Beirut, Dār al-Kutub al-Ilmiyya, n.d.)。翻訳書に W.J.Prendergast (tr.), *The Maqāmāt of Badī' al-Zamān al-Hamadhānī*, (London, Curzon Press, 1973) がある。

たのじゃ。見ればその男はたいそう清々しいいでたちで、頬骨を突き破らんばかりの勢いの美髭をたくわえ、チグリス、ユーフラテス両河の水を沁み込ませたような澄みきった眼をしていた。儂に向かってその男は恭しく挨拶し、その礼儀正さに儂もつられて、丁重に言葉を尽くして男を誉めあげた。

ハマザーニーの『マカーマート』はそれぞれ独立した長短52のマカーマ(逸話)から成り⁶⁾、各話は全て「イーサー・ブヌ・ヒシャームは我らにこう話して聞かせた」という一文で始まる。この形式はイスナードと呼ばれ、預言者ムハンマドの言行を伝え、『コーラン』に次ぐ権威が認められているハディースに特徴的なディクションである。ハマザーニーはその形式を踏襲した、という点で研究者の意見は一致している⁷⁾。

情報の伝承経路を明示する慣行は、ハディース集成を端緒に勃興した文学、歴史学、法学、神学、等々を含むイスラム諸学においても遵守されており、ハディースの場合と同様にイスナードはイスラム諸学を支える形式でもあった。これらの学問の究極の目的は、『コーラン』を誤りなく正しく理解するという一点に収斂する。この目的のために、伝えられた情報資料(ハバル)の信憑性ととともに、それらの情報を伝えてきた伝承者達の信頼度が重視された。各ハディースは預言者にまで遡及する長い伝承過程を持ち、それに従って伝承内容(マトン)は、真正で信頼できるものから、信頼性の薄弱なものにまで分類され、序列化が行なわれた。伝承者の人格、学識面での信頼性を精査する「伝承者学 *‘ilm al-rijāl*」というイスラム世界独特の学問分野も発達している⁸⁾。このようなハディース研究を通して、前述の様々な学問が発達してきたのである。

学問分野のみならず、アッバース朝初期より徐々に発達してきた散文作品を中心とする文学においても同様のことが指摘できる。膨大な百科全書や人名録から派生し、逸話集を筆頭とするアダブ物と総称される書物には全てイスナードが付されている⁹⁾。たとえ教化目的としてよりも娯楽目的のほうが強

6) ハリーリーの作品とは異なって、ハマザーニーの『マカーマート』には未だ信頼に足る校訂本がなく、400という数は論外としてもマカーマの数に関して論議がなされているが、マニユスクリプトを精査したリチャーズの主張する52が現在のところ最も有力な説として認められている。Richards *op.cit.*. 上記ムハンマド・アブドゥフ本では「シャームのマカーマ」がその好色的内容(*mujūn*)により省略されている。Monroe, *op.cit.*, p.14, f.n., 11.

7) 代表的な意見に、Monroe, *op.cit.*, p.21, S.A.Bonebakker, “Nihil obstat in storytelling?” R.G.Hovannisian & G.Sabagh (eds.), *The Thousand and One Nights in Arabic Literature and Society*, (Cambridge, Cambridge University Press, 1997), p.69 が挙げられる。

8) *The Encyclopaedia of Islam* (N.E.), s.v., *‘ilm al-rijāl*, R.Allen, *The Arabic Literary Heritage*, *op.cit.*, pp.224-228.

9) D.Beaumont, “The Trickster and Rhetoric in the Maqāmāt,” *Edebiyāt*, V (1994), p.2, S.Leder & H.

い作品であっても、その情報の出所先を明示する慣行が定着していた。このような伝統の中にハマザーニーが全編を通して、一人の架空の人物であるイーサーに話を語らせるという全く新しい試みの作品を作り出したのである。各マカーマ冒頭の「イーサー・ブヌ・ヒシャームは我らにこう話して聞かせた」という一文は、形式的にイスナードを踏襲しているが、伝承者が一人の伝える情報は著しく信頼性に欠け、かつその唯一の伝承者が無名の、おそらく架空の人物であり、そのような人物の伝える話は全く信用に価しない¹⁰⁾。つまり、『マカーマート』の各話は冒頭にイスナードを付すことにより、かえって以下の情報が不確かなものであることを明示している。イスラム諸学やアダブ文学の伝統形式を逆手にとって、以下に開陳される話が架空の人物の伝える全くのフィクションであることを冒頭で宣言しているのである。この露な虚構性こそが『マカーマート』と従来のアダブ文学が生み出した逸話文学とを分かつ相違点であり、ハマザーニーが新しい文学の創始者と見做されている所以である。

勿論、全くのフィクションにはせずに、イスナードを付してアダブ文学の伝統を踏襲する形式にした背後には、想像力から生み出された虚構の物語に対する一種の忌避感もあっただろうことは、マカーマート文学の大成者であるハリリー『マカーマート』の序文が雄弁に語っている¹¹⁾。12世紀に至っても、未だにその作品が教化目的であることを弁明する必要があったほど、事実に基づかない想像力の産物であるフィクションに対する忌避感が存在したのである¹²⁾。預言者ムハンマドが詩人と混同されるのを嫌い、ためにイスラム勃興後、一時期詩が衰退したり、イスラム改宗後詩作の筆を折った詩人もいる¹³⁾。詩人は虚偽の文句を吐くという理由である。アラブ文学の王道をなす詩においても絶えず虚偽論争があったが、新参の散文作品においても同様の見方があったことは容易に想像しうる。アッバース朝初期に翻訳さ

Kilpatrick, "Classical Arabic Prose Literature: A Researchers' Sketch Map," *J.A.L.*, XXIII (1992), pp. 18-22.

- 10) ハマザーニーが師事したとされるイブン・ヒシャームという名の伝承学者が知られているが、ハマザーニーがこの人物名を『マカーマート』の語り手の名前に使ったかどうかは不明である。Monroe, *op. cit.*, p.25, f.n.14, p.120, D.S.Richards, *op. cit.*, p.90.
- 11) al-Sharīshī, *Sharḥ Maqāmāt al-Ḥarīrī*, ed. M. A. F. Ibrāhīm (Cairo, al-Muʾassasa al-ʿArabiyya al-Hadītha, 1969), vol.1, p.19, pp.44-46. Th.Chenery (tr.), *The Assemblies of al-Ḥarīrī* (London, Williams and Norgate, 1867), vol.1, pp.106-107.
- 12) S.A.Bonebakker, *op.cit.*, p.57, ff.
- 13) 例えば、アラブ詩の範型と見なされている『ムアッラカート』に作品が採用されている大詩人の一人であるラビードは、ヒジュラ暦30年まで生き長らえたにもかかわらず、イスラム入信後は詩作活動を放棄し、『コーラン』の学習に専念したと伝えられている。Abdulla El Tayib, "Pre-Islamic Poetry," A.F.L.Beeston et al. (eds.), *C.H.A.L.*, p.41. この逸話の信憑性を疑う研究者もいる。cf., L.S.Meisami & P.Starkey (ed.), *Encyclopedia of Arabic Literature* (London, 1998), s.v., *Labīd ibn Rabīʿa al-ʿĀmirī*.

れた動物寓意譚である『カーラーとディムナ』を除いてアラブ文学史上に虚構の散文文学が生まれるのは『マカーマート』まで待たなければならない理由の一つに、このような虚構の文学に対する否定的な風潮が考えられる。しかしハマザーニーは旧来のアダブ文学の伝統形式を墨守しながら、その語りを架空の人物に付託する大胆な文学形式を取ることで、虚構の作り話に対する忌避感という隘路を抜け出し、新生面を開いた。ハリリーの述べる「彼こそ新しい形式の創始者」という言葉の意図はこのことを指すのであろう¹⁴⁾。『マカーマート』は一貫して架空の人物が語り手となって、旅先で見聞した主人公、イスカンダリーの悪の行状を語り聞かせるという形式を守っている。ただしハマザーニーの作品ではイスカンダリーの登場しないマカーマもあり、一人の語り手と一人の主人公という厳密な形式の作品はハリリーにおいて完成される。

架空の語り手が紡ぎ出す架空の人物の行状記という新しい形式により、アダブ文学¹⁵⁾、特に逸話文学の成果を自由に活用できるようになったことも、この形式が生み出した利点として挙げられよう。集成された膨大な文献の中から、作者は意のままに逸話を拾いだし、換骨奪胎して自己の作品の中にはめこむことが可能になったのだ。広く流布し、人口に膾炙した、言わば文学的トポスとなっていたものを下敷きにしたマカーマが数多く指摘されている¹⁶⁾。その際に、ハマザーニーは主人公のイスカンダリーを、変装の名人で機知と弁舌を武器に人を陥れる悪業を繰り返す人物に設定し、金に執着するという固定した性格を与えている¹⁷⁾。多種多様な人々の逸話集とは異なり、

14) al-Sharisi, *op.cit.*, p.21, p.24.

15) 明確に定義づけられることなく漠然と多様な意味でもちいられるアダブとは、広義には韻文、散文を問わず中世イスラム世界におけるアラビア語著作の総体を指す用語であるが、やや狭義の意味として書記官僚 (*katib*) 達の要請に応えるべく集成された知識の総体を表し、雑然とし網羅的な百科全書的な性格を持つが、伝統的な倫理観に則って取捨選択されており、教化目的に合致した著作を指す。それゆえ、この定義に従えば、当然のことながら『千夜一夜物語』は内容、文体、虚構性、のあらゆる意味においてアダブという概念に合致しない。al-Jahiz (d.868) の諸著作を嚆矢に、Ibn Qutayba (d.890) の『情報の泉』、Ibn 'Abd Rabbihi (d.940) の『唯一の首飾り』を一つの頂点とする作品群を指す。S.A.Bonebakker, "Adab and the Concept of belles-lettres," J. Ashtiany, *op.cit.*, pp.16-27., A.F.L. Beeston (1975), *op.cit.*, p.34, S.Leder & H.Kilpatrick, *op.cit.*, pp.19-23., A.Cheikh-Moussa et al., "Pour une re-lecture des textes littéraires arabes: éléments de réflexion," *Arabica*, XLVI (1999), pp.524-526.

16) 特に上記[注15]の al-Jahiz や al-Khaṭīb al-Baḥdādī (d.1071), *Kitāb al-Bukhālā'*, al-Tanūkhī (d.994) の *al-Faraj ba'da al-Shidda* を代表とする逸話文学作品と共通したマカーマが広く知られている。Sh. Dayf, *op.cit.*, p.20., A.F.L. Beeston (1975), *op.cit.*, p.2, J.N. Mattock, *op.cit.*, p.2, D. Beaumont, "A Mighty and never Ending Affair: Comic Anecdote and Story in Medieval Arabic Literature," *J.A.L.*, XXIV (1993), p.139.

17) イスカンダリーをトリック・スターととらえる研究者がいるが、いずれも変装の名人で、雄弁で人を欺く性向を彼の本質とみなしている。D. Beaumont (1994), *op.cit.*, pp.12-13., F. Malti-Douglas, "Maqāmāt and Adab: 'Al-Maqāma al-Maḍīriyya' of Al-Hamadḥānī," *Journal of the American Oriental Society*, CV (1985), p.250.

一人の人物の行動に焦点を当て、その人物像を浮かび上がらせることにより、作品全体に整合性が生まれた。また首尾一貫した形式に従うことで、読者、あるいは聞き手は、イस्कンダリーが今度はどのような機知を働かし、雄弁を発揮して相手を騙し込むのか、と期待感を膨らませながら読み進め、話の展開を予想するという楽しみも与えられている。「バルフのマカーマ」では、冒頭の凜凜しい出立ちの若者が実は単なる物乞いであることが暴露される。イस्कンダリーは時には完全武装の騎士、またある時はイマーム、さらにまた理髪師と、変幻自在に姿を変えて、諸国を放浪している。しかしながらその生業が言葉巧みに人を騙す行為であるという点で首尾一貫している。

『マカーマート』全編を注意深く読み進めると時空間に齟齬があることが分かる。各マカーマは語り手のイーサーと主人公のイस्कンダリーが旅を続け、各地で偶然に邂逅することになるが、二人の旅の経路は一切不明で、各マカーマ間に連続性がない。歴史的な事件に言及されていても、年代に一貫性がない。さらに二人の年令に関しても、この「バルフのマカーマ」では共に若者とされているが、第25話「飢饉のマカーマ」ではイーサーの方が年上とされており、またその逆の場合もある¹⁸⁾。このように各逸話間の時間、空間に関する齟齬は、また虚構性を暗示する仕掛けの一つとなっている。

さてこの「バルフのマカーマ」では事件らしいものは何一つ起こらない。日頃から言葉に関心を持つ語り手のイーサーが、旅先で出会った若者の流暢な言葉使いに魅了され、求められるままに金を差し出す話が語られているだけである。それゆえこのマカーマは事件の展開や話の内容よりも、若者の言葉使いそのものをテーマとしたメタ言語的なフィクションであると言える。『マカーマート』各話は雄弁と博識を武器に世人を騙しこむ行脚をしている人物の報告記であり、その男の操る言葉の流麗さが『マカーマート』全編に通底するテーマとなっている。この『マカーマート』の特徴を最もよく表しているのが「バルフのマカーマ」であり、このマカーマには物語性は希薄であり、逆に雄弁というテーマ性が突出している。文は人を表さず、流暢な言葉使いの若者が実は単なる物乞いであつたという、各話に共通する終結部の展開はあるものの、主眼は語り手と主人公の言葉の応酬にある。

かくしてハマザーニーの『マカーマート』は、ファクトとフィクションを接合する装置としてイスナードを利用し、雄弁という各マカーマに通底するテーマを持つ虚構の文学作品と結論づけられよう。各マカーマはこのテーマに即して様々な変奏を繰り広げるが、次に第22話「マディーラのマカーマ」

18) 一例を挙げればイーサーはサイフ・アッダウラ (916~967) の宮廷に伺候した話を語るとともに、カリフ、アル・マフディーの統治時 (775~784)、カーディーを務めていたアブー・バクル・ムハンマドという人物と同道した話を伝えている。Monroe, *op.cit.*, pp.110-116.

を対象に、このマカーマが物語論的にどのような構造をなしているかを考えてみよう。

従来、『マカーマート』は脚韻とパラレリズム（対句表現）を基調とするサジュウ（押韻散文）と呼ばれるその独特の文体が称揚されるのみで、話の内容は荒唐無稽な作り話として看過されてきた¹⁹⁾。しかしハマザーニーの『マカーマート』は「バルフのマカーマ」では希薄であった物語性に富む逸話を多く含み、そこでは全体に精緻な構造を持ち、コトバの特質が最大限に生かされている。『マカーマート』は文学が言葉による現実の新たな認識の手段であることを示しており、決して勝手な想像力が生み出した荒唐無稽な作り話ではない。『マカーマート』各話に共通する雄弁をテーマとし、物語性に富み、複雑な展開を見せる「マディーラのマカーマ」に即して、内的な構造とコトバの諸機能がどのような効果をもたらしているのかを考察してみよう。このマカーマはハマザーニーの作品の中で最も長いマカーマの一つである。

第3章「マディーラのマカーマ」の言語遊戯

イーサー・ブヌ・ヒシャームは我らにこう話して聞かせた。儂がバスラにいた時、たまたまアブー・ファトフ・アルイスカンダリーも彼の地におった。あ奴は弁舌を自家薬籠中のものとして巧みに操り、文章を飾る術をも身に付け、意のままに動かしていた男じゃ。二人とも食事に招かれて宴席に向かった。……ところが、ご馳走のマディーラがテーブルに供されるや、あの男がいきなり立ち上がり、この料理に難癖をつけ、呪いの言葉まで吐く有様じゃ。

「マディーラのマカーマ」はこのような書き出しで始まる。列席者達はイスカンダリーの剣幕に恐れをなし、泣く泣くマディーラをテーブルから下げさせた後で、不思議に思いその訳を質すと、同じマディーラにまつわるバクダードでの出来事が枠内物語として語られる。

マディーラというのは預言者ムハンマドの側近も賞味したとされる料理で、肉をミルクで煮立てたもので天下の珍味とされる逸品である²⁰⁾。イスカ

19) シャウキー・ダイフのようなアラブ文化人のみならず、ニコルソン、ギブ、グルネバウム、等々のヨーロッパのアラブ文学研究者の意見も同様であった。Sh. Dayf, *op. cit.*, pp. 22-23, R. A. Nicholson, *A Literary History of the Arabs* (London, 1907), p. 329, H. A. R. Gibb, *Arabic Literature: An Introduction* (Oxford, 1963), pp. 101-102, G. E. Von Grunebaum, *Medieval Islam: A Study in Cultural Orientation*, 2d ed. (Chicago, 1953), pp. 288-289. ただしシャクアは『マカーマート』の物語性を高く評価している。M. Shak'a, *op. cit.*, pp. 390-406.

20) Monroe, *op. cit.*, p. 147. Prendergast, *op. cit.*, p. 88. 有名な伝承者のアブー・フライラが食した記録や、ウマイヤ朝の初代カリフ、ムアーウィアの豪奢な生活ぶりを示す逸話が残されている。Ibn al-Tiqaqā, *al-Fakhri* (Beirut, Dār al-Shā'ir, n.d.), pp. 107-108, C. E. J. Whitting (tr.), *Al Fakhri* (London, Luzac, 1947), pp. 105-106.

ンダリーはある時バグダードで富裕な商人と知り合いになり、マディーラを振る舞おうと誘われ、半ば強引に男と同道することになる。家に向って歩きだすや、早速その商人は自分の妻の自慢話を長々とし始める。やがて自宅に近付くや、彼の家の立地条件がいかに素晴らしいかを滔々とまくしたて、やっと家に辿り着いたと思うや、ドア、窓、壁、さらに家の中に入ると、今度は敷物と、自慢話は行く所、目に入る全ての物に及ぶ。男の自慢話が長くなるに比例して、イスカンダリーのマディーラに対する抑圧された欲望はますます掻きたてられ肥大する。客の心理を見透かすように、主人は話の区切りでさり気なくマディーラに言及する。言葉の洪水と相俟って緊迫感を徐々に増していく劇的構成の妙が発揮されている。

この両者の緊張をはらんだ関係はテーブルについた時に頂点に達する。男は例によって給仕する下僕や召使の自慢話に耽り、一向に食事を出そうとしない。男は食事の前の手洗い用の水をもこんな風に自慢する。

おい、お客人に水を注ぎなさい。もうすぐ食事だ。ささ、この水がご覧になれますかな。何と澄みきっていることございましょう。まるで猫の目のようにまっ青で、水晶のように透明でございましょう、ユーフラテスから運ばせたものです。一晚置いておくと、まあ篝火のように輝きを増し、乙女の流す涙のようにキラキラと光耀くのです。……さてこのテーブルのナプキンでございしますがな。なんならそのお話をいたしましょうか。これはジュルジャーンの布をアッラジャーンで織りあげたものです。たまたま私が手にいれたものでしてな。買ってきた布を妻が下着に使い、残った布をナプキンに仕立てあげたのでございします。下着に20腕尺も使ったので、残った布を妻の手から無理遣り取り上げて、刺繍屋に渡すと、ほらこの通り見事な刺繍をほどこしたナプキンに仕上げたのでございします。売りに出ていたのを再び私が買い戻して、大事なお客様のためにと、箱の中に収めておいたのでございします。下賤な者の手に触れたことも、ご婦人どもの妬みの目に曝されたこともございしません。ほら、昔から言いますでしょう、大事にしまっておいた物を持ち出す時がきっとあり、道具にはそれぞれの使い手ありと。

たかが一杯の水に美辞を弄し、女性の下着と食卓で用いる小巾が同一の布から作られている話を披露し、聞き手の困惑に気付かぬ無神経さに愛想を尽かせて、イスカンダリーは堪忍袋の緒を切って怒りを爆発させる。

「(マディーラが出されるまでに) まだパン焼きとそれに使う道具、焼き上がったパンの自慢話が残っている。さらに小麦をどこで買ってどんな風に運んできたかの話が続き、ひき臼や捏ねあげた器についても事細かに話すだろう。竈やそれを扱う職人、そして薪のこともまだ済んでいない」

男の際限の無い自慢話につられて、イスカンダリーも同じ罠にハマり勝手な連想を繰り広げ、主客入れ替わったその変貌ぶりが笑いを誘う。そして次から次にと連想の翼を広げた挙げ句、最後に「こりゃあ堪らん、永遠に終わりの無い話じゃ」と悲鳴を上げる。

イスカンダリーはここに至ってやっと商人の思考法に気がつき、彼には食事を供する意志が毛頭無いと判断し、意を決して「一寸、用足しに」と席を外そうとすると、その言葉尻を捉えて男はまたも便所の自慢を始め、壁を伝う蟻も滑り落ち、蠅も足を取られるほどに磨きあげられており、そこで食事を所望する人もいと自慢する。このトイレ自慢において、物とそれが果たすべき機能に乖離が起きており、前述の人に秘すべき下着と人目に曝されるテーブル・ナプキンの同一視と相俟って、男の思考法が尋常ではないことが暴露されている。

欲望達成が完全に不可能と悟り、最早これまで、長居は無用と、制止を振り切って家を出ようとしたところ、「アブー・ファトフ、まだマディーラが」と主人が呼びかけ、その声を聞きつけた子供達が、その言葉を客の名前と思いこんで、「アブー・ファトフ・アルマディーラさへん」と大音声を発した。それを聞いて、イスカンダリーはどこまでも相手が追い掛けてくるものと思ひこみ、恐怖にかられて手元の石を投げると、運悪く一人の子供に当たり死なせてしまう。ためにイスカンダリーは打擲され、二年も投獄されたと、マディーラをめぐり身に降りかかった災難を話し、以後、二度とマディーラを口にしないと誓ったことを同席者達に聞かせて枠内物語は終わり、バスラでの宴会の場面に戻る。

イスカンダリーは、「ハムダーンの人々よ、儂は道に外れた事をしましたかな」と古詩に因む文句をさりげなく吐く²¹⁾。この台詞に応じて、一同はイスカンダリーの話に同情し、彼のマディーラに対する嫌悪感を理解し、彼と同じくマディーラを二度と口にしないと全員が誓う。そして最後に「まことに古より、マディーラは自由身分の者に悪さをしかけ、高貴な者より下賤な者のほうを選びとったことだ」という述懐がもらされて終わる。

この「マディーラのマカーマ」はイスカンダリーが雄弁を武器に人を騙す様子を記述する通常のマカーマとは異なって、イスカンダリー自身が被害者となった経緯を話す体裁をとっている。言わば通常のマカーマと逆転した構造をなしており、この逆転した構造はさらに、枠物語と枠内物語に見られる対立反転構造によって拡大されている。二つの物語は商人よりの招待を共通項

21) 「他部族が襲いかかったその時に、我らも敵を襲いしが、ハムダーンの人々よ、この行いは道に外れし業なりか」という古詩の一句の後半部。『Abd al-Hamid, op.cit., p.143の注に依る。

にして、マディーラが出される\出されない、イスカンダリーが加害者\被害者、彼が話す\話さない、彼の名誉が高められる\失墜する、という鏡像関係をなしており、この反転構造によって両物語におけるイスカンダリーの立場の相違を際立たせている²²⁾。杵物語ではご馳走のマディーラを罵倒し呪詛するという異常な行動によって、かえって自己の行為の正当性を一同に認めさせたが、杵内物語では自己の武器である博識と雄弁を相手に奪われて、その被害者となる滑稽な姿が描かれていた。それゆえ、冒頭のイスカンダリーは弁舌と修辞の大家であるという人物紹介が一層皮肉さを強調する効果を發揮している。

このように「マディーラのマカーマ」はイスカンダリーが被害者となるという、通常のマカーマとは逆転した構造になっているが、雄弁という『マカーマート』全体に通底するテーマから逸れるものではない。いやそれどころか、全編にわたって言葉が洪水のように吐き出され、その言葉が遂に悲劇を生み出す過程を心理的サスペンス豊かに描きだしている。先に見た「バルフのマカーマ」と同じく、このマカーマも言葉そのものがテーマとなっており、言葉が内包する様々な機能を駆使した作品であると言えよう。以下に「マディーラのマカーマ」において、苦い笑いと劇的緊張感を盛り上げるために、コトバの特性がどのように利用されているのかを考察する。

このマカーマで顕著なのは言葉に含まれる暴力性である。商人が「この壁は……」「この窓は……」「この召使は……」と発語する度にイスカンダリーの緊張は高まり、欲求不満は増大する。言葉に胚胎する暴力性が顕在化する。否、子供は言葉の誤解により殺され、他方、イスカンダリーは打擲され、投獄されるという実際的な被害を受けているのである。不条理劇において言葉が人を追い詰め、破滅に導く様が描かれているのを想起させる斬新さがここには存在する。洪水のように吐き出される商人の言葉は、その言葉が指し示す物の本質から逸れ、何ら現実認識に寄与しない。コトバはその本質的機能である情報伝達の役割を果たさず、単なる物理的な音に解体されて、人に襲いかかってきた。

またこのマカーマではコトバの曖昧性、あるいは場面依存性が利用されている。イスカンダリーが投獄されるという悲劇を生む端緒となったのは、暇乞いの「用足しに *qaḍā al-hāja*」という台詞である。この表現は日本語と同じく二様に解釈できる。「約束していた用事を果たす」という意味と「排泄行為を行なう」という意味が含まれている。イスカンダリーはその場から逃

22) 杵物語と杵内物語の進行を図示すると、(杵物語)商人の招待⇒受諾⇒約束履行(供応)⇒退席⇒戻る⇒加害者\ (杵内物語)商人の招待⇒受諾⇒約束不履行⇒退席⇒戻らず⇒被害者、という鏡像・反転構造をなしていることが分かる。

れるために前者の意味でこの言葉を使ったのだが、相手は意図的に後者の意味に解釈してイスカンダリーをトイレに誘い、悲劇の幕開けとなる。コンテキストに応じて言葉の意味は確定されるが、対話者の一方がコンテキストを無視し、社会的コードを逸脱すると、コミュニケーションは阻害され、対話は成立しない。暇乞いし、その場から逃れた積もりが、逆に相手に自慢の種を与えることになってしまった。イスカンダリーのそんな絶望感を顧慮することなく更にトイレ自慢を続ける商人。この両者の対称的な姿は自ずと笑いを生み出し、両者のコトバの解釈のズレは滑稽感を醸し出すが、このこともまた不条理劇に通底する事実であり、不条理劇の多くが「悲喜劇」と名づけられる所以である²³⁾。「マディーラのマカーマ」の枠内物語で描き出されているイスカンダリーの困惑した姿は、イヨネスコやアダモフの作品中の人物を想起させる²⁴⁾。

第34話「乳酪のマカーマ」は、コトバの解釈のズレから滑稽感が生まれる同様の構成法をとっている。夜半訪れた旅人達に対してその家の主人は「……はどうだい」と、次々に料理名を挙げて、腹を空かせた旅人の期待感を盛り上げる。目当ての料理から無限に対象が遠ざかる「マディーラのマカーマ」とは異なっており、逆にこのマカーマでは具体的な料理名を挙げ、その調理法を事細かに説明して相手の食欲を極限にまで掻きたてていく。そして最後に、「若い衆よ、こんな料理はお好みかね、きっと伯父さんもお好きだろう」と相手の期待をはぐらかし、旅人達を絶望に陥れる。「私はただ……はどう思いますか *mā ra'yukum fī...*」と言っただけで、「……をひとつどうですか」と勧めたつもりはない、というのがこの主人の論理であり、「マディーラのマカーマ」と同工異曲の作品であると言えよう。

この「乳酪のマカーマ」は *mā ra'yukum fī...* (what do you think of...?) が疑問文とも勧誘表現とも取れる言葉の曖昧性、場面依存性を唯一のモチーフにした逸話である。このモチーフはイエイツの有名な詩行 *How can we know the dancer from the dance?* をめぐって展開されている現代批評理論が下すのと同じ解釈を指向している。この詩行は多様な解釈を許すが、その多様性はこ

23) M. Esslin, *The Theatre of the Absurd*, 3rd. ed., (Penguin Books, 1991), pp.191-192, p.411.

24) 例えばイヨネスコの『授業』では、家庭教師の言語学の講義が徐々に意味を失っていき、言葉も遂に空虚な音の羅列と化し、教授が性的錯乱状態に陥って最後には生徒の女学生を殺す姿が描かれている。安堂・木村・他訳『ベスト・オブ・イヨネスコ 授業/犀』白水社、1993年。またアダモフの『タラヌ教授』は海水浴場で風俗素乱の嫌疑をかけられた大学教授が、論理的に申し立てる一切の弁明が無効にされて追い詰められる様を描き出している。『世界文学大系 95 現代劇集』筑摩書房、1975年、所収、アダモフ作(安堂信也訳)『タラヌ教授』。二作とも、論理と言語の専門家たる教授が、その論理と言語に欺かれ、破滅に至る姿をテーマとしている。また岡崎桂二「夢の劇、劇の夢—タウフィーク・アルハキームの不条理劇の構造」(『四天王寺国際仏教大学紀要』31号、1999年)は、不条理劇の基本構造を解明した論考。

の一行が疑問文と修辞疑問のニュアンスを同時に含み、そのどちらでもあり、どちらでもない、という文学言語が前提とする二項対立脱構築に懸かっている²⁵⁾。ハマザーニーは文学言語、否、言語一般に含まれる曖昧さを見事に「乳酪のマカーマ」に於いて顕在化させている。第25話「飢饉のマカーマ」も「乳酪のマカーマ」と全く同じモチーフの作品であり、『マカーマート』中には全く同一の逸話は無い、という彼の豪語に反する事実であるが²⁶⁾、それゆえ一層ハマザーニーの言語の持つ機能に対する執着が感じ取られよう。

次にこの「マディーラのマカーマ」で利用されているのがコトバの線状性である。このマカーマの枠内物語は「アブー・ファトフ・アルマディーラ」と主人が叫ぶところでクライマックスを迎える。3語の間にパンクチュエーションを置くだけで顕在化する意味の変貌。「カネオクレタノム」式に²⁷⁾、笑い話に使われ、子供達の遊びにもしばしば利用されている言語現象である。コトバ、特に音声言語に顕著な線状性をプロットとする言語遊戯がここにある。人のコトバは間断無く時間軸に沿って流れ去る。その音の連鎖を断ち切って、分節することで意味が浮かび上がってくる。商人が料理名として叫んだ(アル)マディーラという音の連鎖が、子供達には固有名詞の一部として聞こえ、アブー・ファトフ・アルマディーラと呼び掛けられる。いつまでも自分の名前が連呼され、どこまでもマディーラが追い掛けてくると思い込み、恐怖にかられて石を投げつけたのが運の尽きであった。音の連鎖、コトバの線状性が生み出した悲劇である。

一人の命が失われ、石を投げた本人は投獄されるという悲劇には、さらに固有名詞が関与している。商人が「アブー・ファトフ、アルマディーラ」と叫んだからこそ、固有名詞において顕著な、指すもの(音)と指されるもの(意味・指示対象)の不可避の連関が起こり、そのため恐怖にかられて石を手にしたのだ。その音連鎖が表象するのはイスカンダリー以外にはなく、イスカンダリー目指してコトバが実態を伴って襲ってきたのである。

さらに子供達が名前と信じこんで叫ぶ「アブー・ファトフ・アルマディーラさん」という音連鎖により、マディーラが渾名(ラカブ)と化して²⁸⁾、その人間の本质の一部を表す。漱石の『坊ちゃん』において、赤シャツとか野

25) 土田知則・青柳悦子『文学理論のプラクティス 物語・アイデンティティ・越境』新曜社、2001年、118~119頁。巽孝之『メタファーはなぜ殺される』松柏社、2000年、42頁。

26) A.Hind (ed.), *Rasā'il al-Hamadhāni* (Cairo, 1928), p.95.

27) 都会に遊学中の息子が故郷の親宛てに金を無心するために送った電信文だが、句読点の位置により、「金送れ、頼む」とも、「金遅れた、飲む」とも解釈できる。

28) イブン・マンズールの *Lisān al-ʿArab* (Beirut, Dār al-Shāʿir, n.d.) は、マディーラを好物としたために Muḍar と呼ばれている人物がいることを記している。勿論、ムダル族の出身を示す名でもある。s.v., m/d/r. ハマザーニーはこの故事を下敷きにしたのかもしれない。

だいこの呼称から、容易にその人物像が想像しうるように、マディーラという音連鎖は、マディーラに固執して被害にあった自分の愚かさを再認識させることになり、揶揄されたかのように感じ、怒りのあまり石を投げつけたのだ。もし商人が「お客人」とか、「まだ料理が」のように普通名詞で呼び掛けていたなら、この悲劇は発生していなかったであろう。世の中に客と呼ばれる人間は無数にいるのだから、イスカンダリーは自分のことではないと無視できたであろう。アイデンティティーを支える自己の名前が基で生み出される皮肉な結果。固有名詞の特性を生かした単純な言葉遊びだが、作者はこんな言語遊戯を随所に仕掛けている。

第12話「バグダードのマカーマ」は、この固有名詞の特性である指示するものと指示内容の緊密な連関性を援用した作品である。話は語り手のイーサー自身が行なう単純な食い逃げ事件である。イーサーは見ず知らずの男に、やあ、アブー・ザイド、久しぶりだな、と呼び掛けて食事に誘う。その誘いに相手は、自分はアブー・ウバイドで、アブー・ザイドではない、と言い張りながらも食物に目が眩み、ずるずるとイーサーの後について行き、ついに食物屋に入る。たらふく食べた後で、喉を潤す氷水を持って来ると相手を言い包めてイーサーがその場から立ち去る、という話である。別人であると言い張りながらも、人違いをこれ幸いと、食物の誘惑に負けて誘いに応じるといふ、人間心理を巧みに活写した作品である。被害者アブー・ウバイドは音声と意味内容が緊密に結び合っている固有名詞の特性を見落とした故に罠に陥ったのである。

ザイドという名は、英語の Jack や日本語の太郎とおなじく、アラビア語において男性を代表する名前である²⁹⁾。いわばザイドという名は、全ての男性を代表しているのだから、その固有名詞としての指示機能は希薄になっている。つまり、ザイドというコトバは、全ての男性を指すとともに特定の男を指すという二重性を孕んでおり、いわば固有名詞と普通名詞の狭間に置かれたコトバと言えよう。このような特性を持つ、男性一般を代表し、最もありふれた名前を使ったところにこの逸話の眼目がある。どこにでもいる人間の一人になりすます、という気安さに引っ掛かってしまったのである。「マディーラのマカーマ」も「バグダードのマカーマ」もともに固有名詞の特性を利用した逸話であり、アラビア語の性質を巧みに生かした作品である。またこのアブー・ザイドはハリリー『マカーマート』の主人公の名前とし

29) アラブ文法学の鼻祖とされるシーバワイフ以来、文法書の例文ではザイドという名前が男性固有名詞の代表として用いられるのが慣用となっている。G. Jahn (übersetzt und erläutert), *Sibawaihi's Buch über die Grammatik* (Berlin, Reuther & Reichard, 1895) (rpt. Hildesheim, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1969), 1 Band, 2 Hälfte, p.9 ff.

て使われているが、その理由も、おそらくこのザイドという名前が持つ特殊性にあるのだろう³⁰⁾。

また「マディーラのマカーマ」に含まれる換喩表現も注目に値する。この商人にとって、物の価値は全てその物が内包する機能から外れて、その物にまつ外面的、物質的な質量に換算されている。いわば指示するものと指示されているものが微妙に乖離して、徐々に元のものとのズレを生み出し、そのズレが笑いを喚起している。イスカンダリーが憂慮するように、テーブルの上に待望のパンが供されても、商人はその焼き加減、色、香り、食感等々、パンそのものに備った属性を自慢するのではなくて、材料の小麦、それを挽いた水車、それを耕した畑、その畑で働く農夫と、パン本来の価値から逸れたものを次々に自慢するだろう。この事物の関連性に基づく比喩、即ち換喩表現³¹⁾は、無限連鎖的に広がり、地球上の全ての事物を覆い尽くすであろう。この事実が気が付いたイスカンダリーは、相手が永遠にマディーラを出す積もりがないと結論づけたのである。商人の自慢の種が尽きないのは、この男が多数の事物を所有しているからではなく、この男の思考法そのものにある³²⁾。一つの物から隣接関係にある他の物への移行を行い、事物連関を無限に繰り広げていくと、アキレスと亀の如く³³⁾、永遠にマディーラに辿り着くことがない。たとえマディーラに言及されることがあっても、商人は材料の肉、塩、ミルク、それらを捏ね合わせる職人の技、その出で立ち、その職人の出身地、と次々に自慢を続け、その対象はマディーラから遠ざかるばかりである。いくらイスカンダリーが武器である雄弁を駆使して相手を説得しようとしても、このような論理の基準となる思考法そのものを変更させるのは不可能である³⁴⁾。商人は詭弁を弄して詐術を謀るのではなく、比喩という言葉の力で相手を屈伏させたのである。

このマカーマ全体に充満するおかしみは、本来の価値から逆転したり、ず

30) シャリーシーの注釈によると、語り手のハーリス・ブヌ・ハンマームという名は最も敬虔な名前と見なされているからであり、他方、アブー・ザイドという名は最もありふれた名前であるから主人公の名前に採用したという。al-Sharishī, *op.cit.*, vol.1, p.48, Th. Chenery, *op.cit.*, vol.1, p.278.

31) マルチ・ダグラスは商人の行為を bisociation という概念で考察し、通常結びつかない二物の連想という定義をこの語に与えている。F.Malti-Douglas, *op.cit.*, pp.257-258.

32) D.Beaumont (1993), *op.cit.*, p.149.

33) 前ソクラテス期の哲学者、エレアのゼノンには、物語言説（ディスコース）がなじみの物語内容（ストーリー）を提示する際に、起こるはずのないアイロニックな常識の転倒が実際に起こってしまうことを論証した。洪水の様に吐き出される商人の言葉により、同様の事態が起きた。パトリック・オニール著（遠藤健一監訳）『言説のフィクション ポスト・モダンのナラトロジー』松柏社、2001年、11頁～15頁。

34) 野内はメトニミーの特質を人間の言語＝認識活動中の「統合」（必然化＝合理化）への意志を体現するものと見ている。この見解を採用すると商人の思考法は人間の最も根源的な欲求を満たす行為と考えられ、その変更は不可能であろう。野内良三『レトリックと認識』日本放送出版協会、2000年、53頁。

れを起こしたりするところから生み出されている。価値の逆転は主人公が被害者となる木乃伊取りが木乃伊になるという全体を貫く構造と³⁵⁾、それを補強する小さな仕掛けとから成る。その仕掛けは、知り合ったばかりの人間に自分の妻を自慢するというアラブ・イスラム社会の倫理に反する商人の行為から始まり、枠内物語全体に埋め込まれている。とりわけ効果を上げているのがテーブル・ナプキンにまつわる商人の思考法である。人に秘すべき女性の下着とテーブルの上に置かれて人目に曝されるナプキンの同一視という倒錯した価値観は、トイレ自慢で遺憾なく発揮される。蟻も滑り落ち、蠅も足を取られるほどに磨きあげられたトイレで食事を所望する客もいると、物の機能を完全に逆転視した自慢話をする。食物の摂取と排出という正反対のものがこの商人の頭の中では矛盾なく結び合わさっているのである。このような思考法は表現媒体であるコトバそのものの働きを危うくさせ、コミュニケーションに齟齬をもたらし、両者の対話にズレが生まれて笑いを誘う。

このように「マディーラのマカーマ」は、細部に至るまで対立・反転構造が張りめぐらされ、その中にコトバの様々な機能が織り込まれたテキストである。現実生活の一齣を掬いあげた逸話を基に、文章を彫琢し、芸術作品にまで昇華されている。かくして、「マディーラのマカーマ」を通して、『マカーマート』の本質は虚構性にあり、その虚構性を支える様々なコトバの機能にあるということが解明できたであろう。

第4章 コトバとの戯れ

前章において「マディーラのマカーマ」は雄弁を基調とする『マカーマート』全体に通底するテーマを基に、コトバの持つ様々な要素を駆使した作品であることが解明できたが、最後に疑問が残る。作者ハマザーニーの意図は、単に自己の武器を相手に奪われてしまったイスカンダリーの滑稽な失敗談を描きだすことにあったのだろうか、という疑問である。『マカーマート』としては異例の枠構造をとり、さらに異例の失敗談を挿入することにより、『マカーマート』全体に変化を生み出す効果はあがるであろうが³⁶⁾、作者の意図はそこに止まるのであろうか。このマカーマにおいても他のマカーマと

35) 「笑い」に関する古典的な研究書であるベルクソンの『笑い』の分類中の「ひっくり返し」、つまりペテン師がペテンにひっかかる自業自得。ベルクソン(林達夫訳)『笑い』岩波書店、1938年、90頁~92頁。あるいは *schadenfreude* という評語を用いてイスカンダリーの陥った状況を説明する研究者もいる。L.E.Goodman, "Hamadhāni, Schadenfreude, and Salvation through Sin," *J.A.L.*, *XIX*(1988), p.35.

36) Mattock は各マカーマが連続して最後のクライマックスに至る *running gag* をなしていると考えたが、Richards は『マカーマート』の信頼に足る校訂テキストが未だ作成されていない現段階では、この説の成立しないことを立証している。J.Mattock, *op.cit.*, p.15, S.A.Richards, *op.cit.*, p.99.

同様に、イスカンダリーは架空の作り話を捏造して語り手イーサーを含む会食者達を陥れたのではないか、という疑問が湧く。『千夜一夜物語』の語り手とは異なって、語り手＝主人公である枠内物語の真偽は、語り手そのものの信頼性に懸かっている³⁷⁾。それゆえ雄弁を武器に詐欺行為を働くイスカンダリーの語る話の信憑性は著しく低い。

ともあれ、この枠内物語でイスカンダリーが語った話の真偽を検証し、その結果が「マディーラのマカーマ」にどのような効果をもたらしているのかを探ってみよう。

前章で明らかにしたように、このマカーマでは随所に論理的矛盾があり、枠内物語冒頭からその虚偽性、作為性は露わにされていた。なぜイスカンダリーは商人の招待を固辞したのか。いかなる言辞を弄しても獲物(＝食事)にありつこうとするトゥハイリーにとって、天下の珍品料理をご馳走しようという相手の好意を断る理由はどこにもないが、彼が断った理由は示されていない。枠内物語冒頭の商人とイスカンダリー間の応酬がいかにも不自然で、イスカンダリーの普段の行動から大きく逸脱していることに気がつかねばならない。彼が架空の作り話を語った可能性は高い。

作者はさらにイスカンダリーにアラブ・イスラム社会の倫理に全く背く行為を語らせている。商人は見ず知らずの人間に自分の妻を自慢し、事細かにその動静を語った、と報告させている。おまけにその内容はアラブ社会の慣習と著しく乖離したもので、金に飽かせて天下の珍品、名品を買い揃えている男が妻を自慢するのに、料理上手で、始終台所におり、ために顔は煤で真っ黒であるという。女性は女性専用の部屋に隔離する習慣のあるアラブ・イスラム社会にあって、富裕な家の奥方が自ら台所に立ち、しかも顔が煤に蔽われているとは。満月のようにまん丸で真っ白い顔を理想とするアラブ社会の美人像とは完全に逆転した口調で自慢していることに気がつくべきだったのである。

このように随所に矛盾を含む話を一同に信じこませたのも、商人のコトバに仮託したイスカンダリーの雄弁さに他ならない。遂には、博識に基づく古詩の引用により、一同はイスカンダリーを善意の被害者とみなし、貴人の地位にまで高めた。かくしてイスカンダリーはマディーラを食べそこなったが、一同を詐術にかけるという目標を見事に達成し、彼の犯行を待ち望んでいる読者、あるいは聞き手の、期待に応えることもできたのである。

他方、枠内物語の中での出来事がたとえ実際にイスカンダリーが経験したことであつたとしても、そこには論理のすり替えがある。イスカンダリーを

37) バトリック・オニール、前掲書、86頁。

陥れたのはマディーラではなく、善意を装い、固辞する相手を是非にと招待しながら、長口舌をふるい、いつまでも約束の料理を出そうとしなかった商人であり、イスカンダリーの怒りはその男にこそ向けられるべきであった。招待を受諾するまで、まるでラキームの犬の如くに付きまとったあの男こそが、呪咀の対象でなければならない³⁸⁾。「招いた人が悪いのではなく、食べられなかったマディーラが悪いのだ」という思考法には、「銃が人を殺すのではない。人が人を殺すのだ」という銃規制に対するアメリカの鉄砲陳情団 (gun lobby) の主張と同じく³⁹⁾、論理のすり替えがなされている。なぜイスカンダリーは詭弁を弄してまでも、怒りの対象をマディーラに向けたのであろうか。その答えはマディーラという料理そのものに求められる。

マディーラは単に美味な料理の名称ではない。それが食卓に供されるかどうか、その宴会の評価に直結し、ひいては主宰者の社会的名声を決定する指標となっていた⁴⁰⁾。いわばマディーラは寛大というアラブ社会で最高に評価される徳目の代名詞であり、寛大さを示す記号と化していた。それゆえマディーラをテーマにする逸話は、それが食卓に供された瞬間に参会者の間に緊張を生み出す。招待主は寛大という評価を勝ちとるためにマディーラを供するが、マディーラが寛大という徳目に記号化されているのだから、それがいつまでも消費されずに残されていることを望むであろう。(あるいは勿論、そんなご馳走を人に食べられてしまうのが惜しい、という人間としての単純な感情であつてもかまわないが)。他方、招待された者もまた招かれた者の義務として、この料理を言葉を尽くして誉めあげ、それを消尽して、相手の寛大さの栄養に浴したことを身を以て示さなければならない。

このマディーラをはさんで繰り広げられる主客両者の攻防は正反対のベクトルを指向し、食べられまいとするバヒール (吝嗇者) と、策を弄して食にありつこうとするトゥハイリー (寄生徒食者) との争いとしてアダブものの文学トポスとなっていた⁴¹⁾。この「マディーラのマカーマ」もそのような先行作品を下敷きにしているが、それらと軌を一にして、杵物語冒頭で一挙

38) al-Hamadhānī, *op.cit.*, p.123. ラキームの犬とは『コーラン』第18章「洞穴の章」で語られる物語において、迫害を避け、信仰を守るために洞穴に避難した人々につき従った忠実な犬の名前。洞穴のある山の名前を指すという説もある。

39) ドワイト・ボリンジャー (小野塚・川島・府川訳)『凶器としてのことば』こびあん書房、1988年、114頁。

40) D. Beaumont (1993), *op.cit.*, p.140.

41) D. Beaumont はマディーラをトポスとする一連の著作を明らかにしており、al-Khaṭīb al-Baghdādī の『けちん坊ども』を淵源に、『マカーマート』、『千夜一夜物語』中の「せむし男をめぐる話」、さらに Ibn Butlān の『医師達の宴会の書』中の挿話を挙げている。素朴でごく短いバグダーディーの逸話と比較してみると、ハマザーニーの作品は文章を彫琢して長大な物語に仕立てあげているのがよく分かる。D. Beaumont (1993), *op.cit.*, p.139 ff.

に緊張の頂点を迎えている。宴会でマディーラがテーブルに載せられるや否や、イスカンダリーはこの料理に激しい嫌悪感を示し、呪いの言葉まで吐きかけ、席を立とうとする。イスカンダリーの剣幕に押されて、贅を尽くした料理はテーブルから下げられてしまった。

彼の態度は料理にかけた手間暇を空費させ、マディーラを供して寛大さを誇示しようとした招待主の意図を挫いたのみならず、著しく礼儀に反する不遜な振る舞いである。その原因は全て怒りの対象をマディーラに転嫁した彼の詐術にある。イスカンダリーはバクダードでマディーラを食べそこなった恨みを、論理のすり替えをし、この場で意趣返しをしたのではないだろうか。彼の一連の行動によって列席者達はむざむざとマディーラが食卓から下げられるのを黙って見詰めるほかなかったのである。彼らは胸の高まりを抑え、涎を垂らし、唾をため、恨めし気な視線を下げられていく料理に送り続けた。イスカンダリーは自分が蒙った被害の一部（彼はマディーラを食べそこなったのみならず、打擲され、投獄されている）をこういう形で晴らしたのではないだろうか。

思えばイスカンダリーは自己を犠牲にし、自身を危険に曝しても詐欺を敢行するという豪胆な性格の持ち主であるから⁴²⁾、身に受けた恥辱を晴らすためには、トゥハイリーとしての本性を覆い隠して食欲を抑え、主人ともども宴席に侍った全ての人間を道連れにするくらい朝飯前のことであっただろう。彼は計算通り見事に意趣返しをしたばかりか、一同の同情を受け、名誉は一段と高められて雄弁家の面目を施したのだから、このマカーマに於いても彼の詐術は功を奏したと言えるであろう。

第5章 結 語

このように枠内物語の真偽は明白には判断できず、その判定は読者一人一人に委ねられているが、虚実何れの場合でも、バスラでの宴席を台無しにし、マディーラの価値を毀しめ、逆に自らの地位を高める、というイスカンダリーの計略は成功したといえよう。どちらでもあり\どちらでもない、という二項対立脱構築を果たし、虚構の中に虚構を積み重ねた作者ハマザーニーの仕掛けは巧妙である。アダブものの文学的トポスを換骨奪胎したこの「マデ

42) 第23話「護符のマカーマ」では、荒れ狂う海上に乗り出そうとする船上で、イスカンダリーは船客に航行の安全を保証するという怪しげなお守り売り付け、更に目的地に無事到着した時に割り増し金を払うことを約束させた。無事に着けば儲けもの、運悪く海の藻屑と消えた時にはこの企みを知る者がもはや誰もいなくなる、という論理からである。運任せの一か八かの詐欺を敢行した。さらに第21話「モスールのマカーマ」では、大胆にも死者を蘇生させるという不可能な試み（勿論、失敗する）に挑戦している。

イーラのマカーマ」が示すように、『マカーマート』の真骨頂は、伝記（逸話）ジャンルと虚構ジャンルの境界を遊ぶ作者ハマザーニーのコトバとの戯れにあり、文中に隠されたコトバの機能の解明なくして、この作品の本質をとらえることはできない。従来、文体面でのみ評価されてきた『マカーマート』であるが、そのテキスト内部には、現代の不条理劇をあたかも先取りしたかのような斬新な言語表現や技法が埋め込まれていた。そしてハマザーニーは虚構の文学作品を生み出すという新しい試みを、まるで遊戯を楽しむがごとく軽やかに演じた。まことに「時代の驚異」という呼称に違わぬ驚異的な先駆性を持った作家だと評価できるであろう。

『マカーマート』に込められたこのような鋭い言語感覚と現実認識こそが、近代においてヨーロッパ流のフィクショナルな作品に接して、アラビア語世界内部から同様の作品を生み出そうとする内発的な衝動を、マカーマート形式に向かわせた一因であったことには疑いはない。その際に作家達は、完成された文体で書かれ、アラビア語散文の模範とされていたハリーリーの『マカーマート』ではなく、未完成だが荒削りで、それだけ人間心理を直截に描き出しているハマザーニーの作品をモデルとしたことは注目に価いする⁴³⁾。シドヤーク（1804～1887）は自作の語り手にハリス・ブヌ・ヒサームというハマザーニーとハリーリーの両作品の語り手をパロディーとする名前をつけたが、ムワイリヒー（1858～1930）にいたっては『イーサー・イブン・ヒシャームのハディース』という、露にハマザーニーの影響下にあることを示す題をつけた作品を書き上げた。ヨーロッパ文化との落差に直面した時に、彼我の差を認識し、かつ自己のアラブ人としての矜持を保つには、アラビア語の力を最大限に発揮できるマカーマートという形式しかなかったのである。このようにマカーマートはアラブ文学に深い影響を及ぼし続けたが、その功績は偏にハマザーニーに帰する。

（この拙文を故藤本勝次先生に捧げます。思えば関西大学大学院在籍の期間は、筆者が最もアラビア語から離れていた時期に当たる。予備校講師（英語）の仕事にはからずも適性を見だし、ために専門分野の勉学を放擲してしまっていた。このような不肖の弟子を温かく見守り続けて下さった先生に改めて感謝し、ご冥福を祈るとともに、先生より課されていた宿題を遅蒔きながら提出致します。）

43) R. Allen, "Literary History and Generic Change," *op.cit.*, pp.7-12. またビーストンはナフダ（文芸復興）期以降、それまで長く名声を博してきたハリーリーの作品に代わって、ハマザーニーの『マカーマート』の方に再び人々の関心が向けられるようになり、両作品の間に評価の再逆転が起きたと考えている。A.F.L.Beeston (1971), *op.cit.*, p.1.